



## 日本スピッツは本当に頭が良いのでしょうか？

柴 稠 (NSC 会長)

日本スピッツ(JS)に対する海外の評価は高く、永年この犬種に接し総てを知り尽くしている筈の私達ですら、その範疇に無い部分まで贅辞と思える評価が伝わってまいります。例えば、「今迄多くの犬種に接しておりましたが、日本スピッツには不思議な魅力を感じます」との書き出しに始まる手紙を、カナダのMrs. Karenより頂いたことがあります。1998年2頭の仔犬を紹介し、念願のJSオーナーになって10ヶ月を経過した頃の彼女からの便りでした。清潔感のある外貌もさることながら、物覚えの良さと細やかな表情、そして可愛いしぐさには、犬として概念外の部分を日々見出し、通じ合える会話の広がりを楽しみにしている。との内容でした。

かつて野性で暮らしていた犬達の先祖は、人間と共生する道を選びました。そして、その子孫は人類の求める様々な用途に適応し貢献してきました。国内では土着犬の総てが獵犬であったように、海外でも多くの犬種が獸獵に鳥獵に従事し、狩獵民族にとってはまさに不可欠な存在で有ったのは容易に想像できます。人々はその犬種の潜在的性能を最大限に活用しました。

例えば、獲物に向かってうずくまる(Sit)セッター、獲物の近くまで行き立ち止まって位置(Point)を教えるポインターなどのPointing Dogと、銃で射った獲物を回収(Retrieve)するレトリバーなど、行動特徴がそのまま犬種名になった例でもあります。犬達の総てでは有りませんが、多くは狩獵犬からも様々な用途に改良され、獸獵犬の中から狼などの外敵から羊を守る護羊犬、俊敏に獲物を追う本能的知能を利用し牧羊犬、小型狩獵犬は愛玩用途に飼育される様にもなりました。そして荷役・狩獵・牧羊・愛玩用途など、体高76cm～18cm体重90kg～3kgの様々な大きさ種類の犬種が広範囲に亘り人々の生活に密着して来ました。

1863年にTHE KENNEL CLUB(英国)が創立され、スポーツンググループに、ハウ

ンド(獸獵)、ガンドッグ(鳥獵、テリア(穴獸獵)の3グループ。ノン・スポーツンググループには、ユーティリティ(伴侶・家庭)、ワーキング(作業)、トイ(愛玩)の3グループ計6Gに分類していましたが、創立より137年経過した2000年にワーキングよりバストラル(牧羊)が分離され、7グループとなりました。日本スピッツは1974年に公認犬となり、ユーティリティグループ(伴侶犬群・家庭犬)に編入されました。またFCIでは、スポーツング(鳥獵)、ワーキング(荷役・救助・警察)、テリア(獸獵)、トイ(愛玩)、ノン・スポーツング(他用途)、ハーディング(牧羊)の7グループに犬種区分し、日本スピッツはノン・スポーツンググループに籍があり、FCI加盟のJKCも同一区分です。

では、海外の日本スピッツはどの様な分野で、人々の生活に関わっているのでしょうか。世界の犬種図鑑には特徴の紹介はされているものの、研究者による記述本には日本スピッツは見当たりません。世界的な公認犬となって僅か29年の歳月を経過した犬種ですから当然のことです。しかし、類似種のスピッツ族が牧羊に従事していた記録は有り、羊達の追い込みには優れていましたが、牧畜を外敵から守る護羊の役割を果たす為には大きさに難点が有り、容姿や性格から自ずと人々の伴侶犬としての地位を確立して来たものと考えられます。

研究者によると、犬族は60種以上の言葉を理解する能力はあるそうです。本能的知能、学習能力、応用知能、判断能力など多くの知能を備え、体を使って社会的、感情的なことからを伝えます。尾、耳、口のすべてが私達に語りかけ、さらには身体全体の姿勢によって特定のメッセージを修正し、情報を追加します。そのうえ声を発し語りかけを万全なものとしませんが、この声の語りかけは家族に対して行なうもので、知らない人には決して言わないそうです。特に、本能的知能の浅い犬種ほど、表情も含めたこれらの語りかけを多

用し、コミュニケーションを大切にしていると考えられます。

犬界では数ある様々な犬種を用途別にグループ分けしました。その中にノン・スポーティングの細分に属する犬種は、実用または愛玩に供するものでなく、系統的に分類し難い犬種を一纏めにしたもので、以前は肩身の狭い意味合い中におりました。時代と共にユーティリティの意味合いが強く、他用途犬から多用途犬に、そして、更には伴侶犬に、人々の意識の中で軌道修正され、人類に最も身近な存在となりました。犬達は荷役、牧羊、狩猟、警備、身障者介助などの専門分野で、人類に貢献し活躍しておりますが、国内で橋犬は皆無とは言えないものの一般的ではありませんし、狩猟犬も一部の人間を除いて伴侶目的で飼育されているのが現状です。したがって犬達の殆どが伴侶犬指同と言って過言ではありません。

日本スピッツは犬族としての本能的知能は決して高くありません。したがって野性味、俗に言う《犬ッぼさ》が極めて希薄です。しかしその反面前述した様な、学習能力、応用知能、判断能力や感情表現を拡大させながら生活環境に順応し、その守備範囲をきめ細かにすることにより、先祖犬の選んだ人との共存を果たしている一つの本能的知能と言えます。この部分が伴侶犬として人気のある要因かも知れません。そして、清潔感のある容姿も然ることながら、ジャーマン・シェパードの様に遠心的知能でなく、求心的な知能と、きめ細かい表現能力に優れておりますので、海外では「友達であり家族以上の存在」「自分を犬でなく人間と思っている犬種」「世界最高の犬種」といった評価も得ております。

しかし、この日本スピッツにも幾つかの泣き所があります。外貌の白さに「汚れやすい」部分もありますが、性格として「神経質」であることが最大の欠点です。この最大の欠点は逆に求心的な知能と、きめ細かい表現能力を醸し出す長所にもなっております。成育時を叱責教育を捨て、褒与教育に徹することが要件で、スウェーデンのJS愛好家は、7ヶ月間は叱ることなく優しさの中で躾をする

とのこと、さすが犬界の先進国の愛犬家と感心しました。

物覚えについては、殆どのオーナーが異口同音に絶賛します。しかし、その反面多くの言葉を覚えていながら、オーナーの言葉でも無視する場合は時として見受けられます。この部分は短所ではなく、長所の所産と理解して下さい。例えば、寝そべっている時など気紛れに、「おいで」と呼んでも一瞥するだけで、『ナンダ、ヨウジデモナイクセニ！』と言いたげな表情で無視します。これは判断知能の優れた証拠で、既にこちらの気紛れを見抜いての対応です。

生後7週間で成犬並の知能が出来上がり、受け入れ体制を整えております。叱責による躾は効率的で手間隙はかかりませんが、主従感覚の強いものとなり、伴侶犬に求められる明朗な信頼関係は築けません。犬は2歳を過ぎた時点で遠心的知能は衰えを始めますが、求心的知能は家族との信頼関係に比例して隙間を埋める様に緻密になるのが、日本スピッツ最大の長所です。そして家族の一人一人をよく観察し、健気に、しかも懸命に、それなりの対応を試みる可愛い伴侶です。たとえ標準書と距離のある個体でも貴重な存在であることに変わりはありません。

私達はこの素晴らしい日本スピッツの愛好者であると同時に、出逢うことの出来る時代に生を受けたことを感謝しながら、先輩からお預かりした健全な犬種保存環境を損なうことなく、後輩にお渡ししなければなりません。その為には本犬種展を普及、改良、保存の場とし、先進国のようにアマチュア精神に徹し、良好な繁殖環境を構築することが、日本スピッツ犬種に恩返し出来る唯一の道と考えます。

2003/11/9 第4回秋季展配布資料

参考文献

*The Intelligence of Dog by Stanley Coren*